中村璋八先生を送る

岸　本　茂　和
（外国語部長）

中村璋八先生の御退任に当たって何か書くようにと編集子から命じられた。正直のところ気が重い。部長なんぞという無粋な役職についていなければ、こんな大役は敬して遠ざけたにちがいない。かと言って、しかし、敬遠するわけにはゆかない。なぜ気が重いのかその理由の一端から書いてゆけば、おのずから筆債は果たせるだろうと腹をくくることにした。

わたくしが外国語部教授会の一員になってからちょうど二十年になろうとしている。当時先生はすでに中国語科主任であられていて、新参教師から見れば巍峨たる高壑のような存在だった。しかもそのご専門の分野がまた、浅薄な中国文芸趣味しかもたぬわたくしにとっては、はなはだ高遠で近寄りがたいもののように思われた。それによって先生が文学博士号を授与された『五行大義の基礎的研究』が古代中国の易経の述べる陰陽五行説の古典的注釈書のご研究であるらしいことはどうやら推察できても、全六巻からなる先生の主要ご著書であると窺われる『重修緯書集成』となると、もうわたくしなぞの理解の埒を超えてしまう。手元にある戦前版の新撰漢和辭典によると、「緯書」とは「経書に附會して説く未来記」と、まるで木を鼻をくくったような不得要領な説明しか載せていない。広辞苑は、「経書に付託して禍福・吉凶・符瑞の予言を記した書物。経書に対していう。詩緯・易緯・書緯・礼緯・楽緯・春秋緯・孝経緯（以上七緯という）など。云々」と説明する。これですこしは漠然とながらも緯書のなんたるかが摑めかけてきた。儒教・儒学ではどうやらその正典をタテイトと見做し、外典をヨコイトと見做すらしい。五経とか六経と称する儒教の経書（正典）にたいする緯書（外典）のこ

とで、「経書に附會して説く未来記」「禍福・吉凶・符瑞の予言を記した書物」とあれば、先生が東京教育大学の学部と大学院以来、その後ずっと研究生活の大半をついやして続けてこられたその主要な研究領域が、未来記・予言、すなわち易占という一点に収斂してゆき、『五行大義の基礎的研究』と『重修緯書集成』において見事に開花したという図式になる、と理解してもあながちおおきな誤りではないであろう。そしてさらにその花萼から学問の蜜蜂が媒介した花粉によって『周易本義』が花ひらき、日本陰陽道に関するご高著となって結実した。先生はまた世界の中国学者の淵叢たる中国本土や台湾の専門研究者のあいだにおいても知名であり、畢生の研究の成果である『緯書集成　上中下』が、御退任を前にした平成七年四月、河北人民出版社から上梓されたをつけくわえておかなければならない。

ところで、冒頭でこの小文を書くのは気が重いと言ったのは他でもない、なにも先生のご専門分野が難解な古代中国哲学だからという訳ばかりではなく、先生とは所属する教室もちがえば、また年齢もひと周り以上もかけ離れた長者でいらっしゃるので、お会いしても通り一遍の挨拶をかわすくらいで、先生に相対しては幸福な言路洞開をわたくしはもっていなかったからだ。それが、いつだったか研究館の廊下で先生と立話しをしたことがあって、おそらくその時はすこし個人的な話柄に渉ったからだったのか、どうも不眠症ぎみでねぇ、とおっしゃる。中村博士と不眠症という意外な結びつきにわたくしはいささか驚いた。そうとすれば先生も 'night person' ということになるではないか。寝つきの悪さにかけては人後に落ちるほうではない。早起き鳥の家妻から顰蹙されたり就寝を督励されてきた夜型人間のわたくしは、そこに同類を発見してなにやらうれしくなり、心中ひそかに中村博士に斎号(さいみん)を贈呈するにした。先生の不眠は不眠不休の不眠、ご研究に没頭するための不眠であって、おなじ不眠でも暮夜ひそかに稗史小説類を読み耽る悪癖が嵩じた挙げ句の不眠とは訳がちがう。不眠斎ではあんまり直にすぎて曲がない。无睡斎ももうひとつだ。可睡斎はいいけれどもどこかで見たような気がする。睡斎はどうかしらん。そう、これをもって可としよう。睡斎の斎号は、しか

し、これ以上の研鑽を積まれてほんとうの不眠症になられてはこまるから、空想の献呈にとどめておこう。

大学の教壇を去ったからといっても、先生のことですから、まだまだ研究をおつづけになることと思います。人生七十古来稀なりとは杜詩の一節だそうですが、いまそれをすでに超越されておられる先生には、悠々自適のなかに、これからもなおいっそうの御自愛を願ってやみません。

同郷人「中村先生」

落　合　和　昭
（第一群主任）

あるとき、中村先生がもうすぐ退職の年齢を迎えられる、と聞いたとき、心のなかで叫んだ言葉は「え！、もう！」という短い驚きの言葉であった。そして、続いて、すぐ心に浮かんだのは、不思議なことに、一冊の本のことであった。その本は、今、私の机上にある。それは中村昌治著『八十八歳の郷土誌』という550ページ弱の大部の本である。この本は、十年ほど前に、中村先生から「父が書いたもので、あなたとも関係があると思われるから」と、頂いた本である。この本は先生の御尊父が新聞や雑誌等に発表したものを、米寿を記念して、先生を含む五人の子供（三男二女）たちが協力して、収集し、出版したものである。御尊父は神奈川県愛甲郡中津村中津（現・愛川町中津）の出身で、神奈川県立農業学校（現・県立平塚農業高等学校）や東京農業大学を卒業した。その後、愛甲農蚕学校（現・県立中央農業高等学校）や光明学園相模原中学校（現・光明相模原高等学校）の教諭などをつとめられ、教育に生涯を捧げてこられたかたであった。しかし、大学生の時代

から、生家の土蔵にあった数々の古文書に目を通すようになったのがきっかけとなり、郷土に対する関心が高まり、教職についてからも、郷土の歴史研究は休むことなく、生涯に渡って、続けられた。この本の全体は「史談」、「民俗」、「地名」、「論叢」、および、「随想」からなり、相模の国、神奈川を多角的にとらえ、極めて実証的でありながら、読んで面白く、郷土に愛着を持っている人々にとっては興味はつきないものである。このような御尊父の郷土史に対する研究姿勢を、幼い頃から、間近に見てきた中村先生には、きっと、それは研究に対する理想的な姿として映ったのではないか、と推察される。あとになって思えば、私が中村先生の定年退職の話を聞いたとき、この本のことを、即座に思いだしたのは御尊父と中村先生の研究姿勢が二重写しになったためだ、と思う。

中村先生が「あなたとも関係がある」と言われたのは、私が御尊父の誕生の地である神奈川県愛甲郡の隣に位置する津久井郡の出身であるためであった。神奈川県地図で調べてみると、御尊父がお生まれになった愛甲郡愛川町の中津は、愛甲郡のなかでも、私の出身地である津久井郡の城山町に最も近いため、私の家がある城山町原宿から直線距離にして、約９キロ、車で数十分の距離しか離れていない。また、中村先生御自身は私の家から約３キロほどのところにあるＪＲ横浜線橋本駅の南口の目の前にあった相原農蚕学校（現・神奈川県立相原高等学校）の御出身である。当時は、現在のように、学校の数が多くなかったので、津久井郡や愛甲郡の進学を希望する学生の多くは相原農蚕学校に進学した。今日、津久井郡や城山町の広報誌などで、郡や町の功労者などの履歴を見てみると、相原農蚕学校（相原高等学校）卒業の文字が目にはいる。ちなみに、城山町の現町長もそこの卒業生である。私の中学生時代（昭和33～35年）には、すでに、神奈川県立相原高等学校と名前が変わっていたが、私の中学時代の同級生うち、最も多くの学生が進学した高校が相原高等学校である。そのため、私の中学時代の友人の多くは中村先生の後輩である。相原高校は、それほどまでに、愛甲郡や津久井郡という地域と長いこと密接に関わりを持った高校であった。しかし、現在では、こ

の地域の人口の激増とともにいくつかの高等学校も近くにでき、相原高校とこの地域との一体感も、昔と較べると、だいぶ薄れてきた。中村先生にとっても、津久井郡には、相原農蚕学校時代の友人が大勢いるらしく、ときどき、「このあいだ、友人に会いに、落合さんの家の近くに行ってきたよ。あのあたりも、昔と較べて、随分変わったね」と声をかけてくださることがある。愛川町や城山町の変貌ぶりはすさまじく、城山町の人口は十倍以上になった。県立厚木高校を卒業してすぐに、宝塚市に移り住んだ父の従兄弟は、何十年ぶりに我が家を訪れたが、そのとき、二十年近くも住んだ町のあまりの変わり方に、しばらく、我が家を探し当てることができず、偶然、その姿を見た母に声をかけられるほどであった。そのため、相原農蚕学校で青春時代の一時期を過ごした中村先生にとっても、その周辺地域の変わりかたには、驚かれているにちがいない。

この度、中村先生を語るにあたって、思い出すのはめったに振り返ることのない、いや、ほとんど意識すらしない生まれ故郷であった。私のように、生まれ故郷の生まれた家に、現在も、住み続けている人間は、ある意味では、故郷の意味がわからない故郷喪失者であるかもしれない。しかし、中村先生というと、他の先生がたとは異なって、私には生まれ故郷と結びつく。中村先生は退職なされても、したいこと、しなければならないと考えていることが山ほどおありだと思いますので、退職後の生活も満ち足りたものになる、と確信しています。御自愛のうえ、おくらしください。

中村先生送別

栗　原　万　修
（第二群主任）

中村璋八先生が定年でお辞めになる。中村先生とのお付き合いは、外国語部の設部以前からであるから、もう随分長いことになる。先生のご専門は漢文のようだが、長い間、中国語教室の主任として外国語部の発展にも寄与された。教授会等ではあまり多くの発言はなされなかったが、〈長老〉としての重みはずっとお持ちだった。そういえば、先生は外見もお若いときと現在もほとんどお変わりになっていないように見える。生活が安定され、細事に煩わされることなくお暮らしだったからかもしれない。

中村先生は学内よりむしろ学外でご活躍されていたようである。年賀状を戴くたびに、いろいろなお仕事をやっておられるのに感心させられた。業績では恐らく大学でも最多のお一人ではないだろうか。

しかし振り返ってみると、先生は教室の運営ではいろいろご苦労をされていたように思う。先生がすすめられた、ある専任人事で教室の意見が割れ教授会でも否決されたことや、中国語所属の非常勤の先生の件が新聞沙汰となり教授会も含め相当にもめたことなどもあったが、先生はその都度、教室の責任者として苦渋の対応を強いられていた。後に先生は教室の主任をお辞めになったとき、喜んでおられたのではないだろうか。

それにしても、先生のことで最も感心させられたのは、どんなときでも不愉快な顔や立腹した顔をされることがなかったことである。いつも笑顔でおられた。教授会で苦境に立たされたときでも、ついぞ激した言葉や怒った顔を見せたことがない。何十年もとなると、そう誰にもできることではない。人間だから不愉快に思わないことはないのだろうが、それを押さえる精神力

が備わっておられるのだろう。見習わなければいけないことだと思っている。

ご両親がご長命な先生は、同じように長生きされて、これからも悠々とお仕事をされるであろうが、それでもやはり、お別れに際しては心からご健勝をお祈りし、合わせてこれまでのご交誼に対し厚くお礼を申し上げたいと思う。

中村璋八先生のこと

岡　俞　寿一郎

中国語科の中村璋八先生が、本年の三月で定年退官されます。御祝いすべきことなのはわかっているのですが、やはり、一抹の寂しさを感じます。日頃、親しく御話しをうかがう折もなく御別れすることとなり、いまさらながら残念に思われます。先生は、つとに知られた東洋学の碩学であり、御業績について私などが言えることはありませんが、ただ、私が、いまもはっきりと覚えている光景があります。二十年以前、私が本学に着任早々の頃、先生が博士号の学位を授与され、その祝賀会に列席させていただきました。その日の、先生の晴ばれとした温顔は、いまも私の脳裡に残っています。古き良き時代を過ごされた最後の学究の一人が、本学を去られますことに、いささかの感慨を覚えます。これからは、どうぞ御元気で、心ゆくまで御研究を続けられますことを御祈りいたします。これまでの御厚情に深く感謝いたします。

中村璋八先生を送る

佐　藤　玖美子

昨年の細川幸夫先生の定年退職に続いて、今度は中国語の中村璋八先生が長年勤められた駒沢大学を去られることになった。大学は新しい改革に向かって歩み始めているが、同時に、思い出に満ちた、なつかしい時代も静かに去りつつあることをしみじみ実感させられる。

同じ外国語部でも、他の語学の先生とはゆっくりお話しする機会がなかなかないものだが、その中で中村先生とは、家が同じ世田谷線沿線にあるために、大学への行き帰りなどで比較的よくお話しする時間が持てたのは幸せだった。いつも先生は資料や原稿のぎっしり詰まった重いカバンを抱えられ、執筆中の著書のこと、あちこちで持たれていた講演の事、また中国や台湾での体験談などを熱っぽく語られた。本当にいつまでたっても若若しく、永遠の青年学者というエネルギーと情熱を感じさせられる方だった。これからは、大学の雑事からも解放され、ますますご研究に専念されることであろう。いつまでもご健康で、ご活躍を続けられることを祈る。

『大学』・解体

小　玉　齊　夫

[「齊」と『大学』]

私の名にはいささか書き難くかつ読み難い「齊」の字がある。書き方を尋ねられた時は説明も厄介なので斉藤の「斉」で構わないと答えているが、「斎」とは、これは語源などを考えると本来は違う字であるらしい。読む際にも「正しく」呼ばれたことは皆無で、これまでにもさいおとかせいおとかのりお、いつおやあきお、さらには「フィクサー」として晩年再び有名になった「ジダマ」の「コダマ」氏との連想でよしお（そして先日は何故かとしお！）などと呼ばれてきた。異なる音で呼びかけられると別人になったかのような奇妙な衝撃が走るものだが、それぞれの呼ばれ方を想い起こす度にそれぞれに懐かしい人の面影が浮かんでくるのは、これは単に私が馬齢を重ねてきた事実を照し出しているだけのことであろう。だが、江戸期の歴史に通じている人でも「齊」を「なり」と読み得なかったのは、「夫」との組み合わせに、字じたいの重みの点で何とはなしの違和が感じられるせいかもしれない。べつに女帝齊明まで遡る必要もないので、島津には齊彬、水戸の齊昭、そして徳川本家には一橋家から入った十一代将軍家齊もいたし、朝廷側の二宮齊敬（だったか？）も含めて、齊が「なり」と読まれて「当然」な時代は確かに存在していたのである。これを要するに、私の「齊」は『大学』の基本概念のひとつ「齊家」から採られたということであって、由緒があるなどということではないが、ともかくもそういう背景を有する字を私の命名者は選んだということなのだ――などと冒頭からおこがましくも自分の名について記すのも、かつて「ああ、齊家（セイカ）のセイね」と中村璋八先生には指摘さ

れた記憶があるからである。

[一例としての西周]

1863年6月4日オランダのライデンに到着した西周は（以下、周知の事柄なので記述は簡略にする)、7月には「支那日本学博士　イヽヘ、ホフマン」宅に下宿、当時のヨーロッパの最新の社会科学を身につけるべく同行の津田眞道とともにフィッセリング教授の自宅で週に二回、経済学・統計学その他五科の講義を受けることになる（当時のオランダの大学生は教授の自宅でも講義を受けていたようで、西・津田が「特別扱い」されたのではないらしい。)これより前、ほぼ一年にわたる船旅の後にロッテルダム港に到着した幕府派遣和蘭留学生一行を迎えた中にホフマンなる人物がいたが、これはもちろん上記の「支那日本学博士」のことで、澤太郎左衛門は「独学で漢字を書き文章も読むことのできる実に驚いた人物」と素直にその出会いの感想を記している。書簡の表書きの漢字がこのオランダ人の手になるものと知って驚き、日本語を駆使する彼に感心したり安心したりの様子は、澤のオランダ滞在の回想に詳しいが、彼処では機関車が走り電気・電灯があり、住居も五階建てであったり蛇口をひねれば水が出たり等々、此方はそれらを聞くのも見るのも初めてという彼我の在り様の歴然たる差異を思い直してみれば、「実に驚いた」という留学生たちの動転ぶり、心細そうな様子を揶揄するのも無意味であることは容易に理解される。彼等の抱いた「敗北感」には十分に社会的・技術的な背景があったのだ。

そのホフマンと西周である。フィッセリングの講義の仲介役を果たしたホフマンと西との往復書簡も残されているが、直接的な「交流」の成果と言うべきものは津田も関与した『大学』の出版であろう。1864年にライデンのかのE. J. Brill社から発行されており、西が主として漢文、津田が「ローマ字読み」の部分を校定したとされるが、「誤字・脱字もなく印刷も日本に於けるより鮮明である」という趣旨の推薦文が、西（西周助の名前で）のは漢文、津田（眞一郎）のそれは草書体の仮名まじり文で記されており、日付は

1863年の9月、彼等がライデン到着後わずか三か月のことである。ということは、既に準備されていた校本を、少なくともこの領域ではホフマンよりもはるかに「専門家」である西と津田の両者が確認したということであろうか。二分冊のその“PART Ⅰ”には、ホフマンによるオランダ語ならびに英語の「序文」と『大学』の漢文原文（朱熹の「序」はないが、「章句」の「経」だけでなく「伝」をも含む）が記されており、“PART Ⅱ”は、同じくオランダ語と英語による「日本語の読み方」の解説と、『大学』原文を日本語で読んだ時の「ローマ字表記」（発音の便宜のために、フランス語のアクサンの如き「傍点」が付されている）から成っている。つまり、書名の『大学』が大學ならびにDE GROOTE STUDIE、THE GRAND STUDYと記されているのと同じように、説明文等は三か国語で書かれているが、本文は、①日本での表記と同じ漢文（「返り点」等は記されているが「書き下し文」ではない）と、②それの日本語読みの「ローマ字表記」なのである。②を具体的に示せば、“Dai-gakûno mitsi vá méî tókû wo akirákâ ní súrû ní árî”というような表記であり、何故か翻訳文は付されていない。オランダ人が「日本語で」読むことはできるが意味は把握し難い、まるで素読の教材のようなこの『大学』原典は、語学教授用あるいは広義の文化「交流」をめざして出版されたものではあろうが、しかし1864年という刊行年も考えると、「実に驚いた」企てと言わざるを得ない。

そして、西周が関与したとされるその原文の、「読み方」である。全体にわたる検討ではないので誤解も有り得るかもしれないが、解釈のひとつの指標である①「在親民」の「親」は「民をアラタニスルに在り」としており、また②「致知在格物」は「知ることを致(いた)すことは物(もの)にイタルに在り」と解している。私などには厳密な判断の能力はないのだが、①に関して言えば「民を親マシメルコトに在り」（武内義雄『儒教の精神』）あるいは「民を親シムに在り」（中江藤樹『大学解』）と読む（古注あるいは王陽明の）学統ではなく、②については「物をタダス」（中江藤樹『大学解』）あるいは伊藤仁齋の「大学は孔氏の遺書にあらざるの辨」（岩波書店版『日本思想大系33』）での

「知ることを致(きわ)むることは物をタダスに在り」（校注者による）という方向（さらには「物」を「物(のり)」とする方向）でもなく、つまりはきわめて「正統的」な朱子学派の読み・解釈が、当時の西周によっては提示されていた ── 後の、たとえば『百一新論』での解釈には徂徠からの影響が見られる（吉川幸次郎『徂徠学案』）という点とは対立するにしても ── ということになる。

それでは、何故、ホフマンの選択は『大学』であったのか。これは、端的に言えば、当時のヨーロッパの日本に対する視線の内実がこの書の内容と重なるから、であると想定するほかない。この想定の解明には江戸期の朱子学の在り様と武士の精神性との交錯が対象化されなければならないが、ここで言及し得る範囲に限定すれば、後に西周が宇宙的構成（物理）と心理との連続性、あるいは形而上的世界と形而下的世界との連続性を批判することになる、その、①朱子学的連続的世界構成論の典型が『大学』に示されているから、ではなかろうか。「思想研究は比較研究である」（中村元）とことさら限定しなくとも、異国趣味、自身の文化とは異なった［論理・感覚・感情］表現に対する「好奇心」は、当然、異質な論理に貫かれた作品を期待するものである。加えて、江戸期武士階級の教養である朱子学の一連の語彙は、「異学の禁」などの思想統制、そして同質的な社会階層構成を反映して、武士の知的共有財産として生活の中での［表現・了解］の根拠を獲得していた。羅山に対する仁齋あるいは後者に対する徂徠派のような内部的な対立・論議も、朱子学語彙の流布をいっそう促進する契機になり得たはずであり、少なくとも武士階級を対象とすれば、江戸期の思想性を象徴する概念はやはり朱子学系統の語彙で占められていたと言わざるを得ない。であるからこそホフマンの日本理解の試みも、朱子によってその価値が賞揚された『大学』へとまずは向けられたのであろう。②『大学』には、当時政治に携わり得た唯一の階級である武士にとっての「道徳的政治学」の原型、「修己治人」というひとつの理想が示されているからである。（明治期の「国民皆兵」制度は「農・工・商」階級をもサムライに「昇格」させることになり ── 今日の中学校での「疑似兵隊教育」や「企業戦士」等の諸語彙を見ると、外からの「日本人＝

サムライ」という見方も含めて、この「国民すべてをサムライにする」企ては見事に「成功」したかに見える ──、朱子の『大学』の影は、江戸期と同様に、新たなサムライを自負する新たな階級へも伸び彼等を覆い尽くし得た ── 薪を背負った金次郎は『大学』を読んでいたとされる ── ようである。)

[一例としての「齊家」]

我が「齊夫」の起源（？）としての「齊家」は、朱子学のいわゆる「八条目」の一項として登場する。「三綱領」・「八条目」という構成は、学問に関わる①格物・②致知、徳行に関わる③誠意・④正心・⑤修身（学問・徳行は「明徳」に関与して修己を形成する)、そして功業に関わる⑥齊家・⑦治国・⑧平天下（功業は「親民」に関与して治人を形成する）とされている（宇野哲人『大学』による。「止至善」の位置づけはいささか不明瞭）が、それではこの「齊家」(家をととのえる）の概念内容はというと、これも解釈者によって細部は異なるのであろうけれど、竹内照夫（『四書五経』）によれば「家長として家族親族を統制し、平和安楽ならしめること」、しかも「ここで問題にしている古代中国の家は、君子本人の兄弟姉妹・子・甥姪・叔父母・使用人などを含む大家族、もしくは多くの分家を含む大親族をさしている」云々ということになる。

「家」の「ととのえかた」じたいが（げんじつの「齊夫」個人の守備範囲をはるかに超えて)、今日風の「家」単位でもなく、社会に於ける「他」との連続性に関与していることは明らかであり、「功業」という観念じたいも「社会－内－存在」の在り様をさらに補強しているようだが、そこから類推するなら、「八条目」全体のそれぞれの連関を繋げている（支えている）のは社会的な、認識ならびに存在様態に関する「連続性への信頼」とでも言うべき精神の方向性、であろうか。

以下の各項目の間には、実際には「(ことを）欲する者は」が介在するのだが（これも周知の事実なので略記する）

〈下降〉　国を治める→**家を齊(ととの)える**→身を修める→心を正しくする→

意を誠にする→知を致(いた)す→物に格(いた)る

という下降の系統性は、これは目を奪うほどに鋭い論述と私などは思うのだが、ひとたび最終項に達すると、今度は各項目の間に「～して后(のち)（に）」が挿入されて、以下のような上昇の道を辿ることになり、結果としてはきわめて楽天的な「系統性の円環」を描くことになる。

〈上昇〉　物格(いた)って→知致(いた)って→意誠にして→心正しくして→
身修まって→**家齊(ととの)いて**→国治まって→天下平らかなり

このような直線的・連続的な［修辞・思考］法は、［上昇・下降］の動きを併置することによってそれなりの説得力を文章技術の上からは発揮していると言わねばならないし、事実、「個人の確立」を言う我々の多くが、しかしその前提として上記の円環の展開をそうとは意図せずにしかし予定調和的におのずと考えていることは、おそらく我々の日常の在り様を注視してみるとそれほど異例ではないものとして認められるようである。さすがに現在の我々は、個人の道徳的（修身的）自制によって国が治まるなどという期待は何らかの錯誤に基づく、と感じてはいるが、しかしそれもふつうは「感じて」いるだけであって、錯誤を錯誤と指摘する論理性を備えているかというと、やはりそれほどの徹底化・普遍化への試みは、自身を省りみても少ないように思われる。個人の在り様が、個人として自立することなく、いつしかつねに集団（国）と「対を成す」ものとして捉えられがちなのも、おそらくはこの連続的な［修辞・思考］法への依存、あるいは連続する感覚への素直な信頼が在りつづけるからなのかもしれない。

この「連続性への信頼」感を支えているのは、「国」あるいは「天下」とされている観念あるいは組織体の形成が①「人間の集合」としてのみ考察され、機構としての国の存在を保障する②「経済・産業・技術の総体」としての考察の必要がなかった時代での思考法、と見ることができる。もちろん、「人間の集合体」としての在り様それじたいは依然としてその後も継続的に存在しつづけているから、「経済・産業・技術の総体」に対しても道徳的行為の延長による処理が可能であるという（礼儀・礼法にかかわる連続性への）

思い込みも、消滅することなくそれなりの妥当性を持って存在しつづけている。したがって、或る時点あるいは或る領域に於いては、「古い！」というだけで切り捨てることの出来ない別種の事柄に、問題領域が移行してしまうことになるのだが、しかしそれはそれとして、ではどのようにしてこの種の「連続性への信頼」は分断され、「解体」され得るのか？

－水平的な、つまりは領域ごとの特性を認め、それぞれの間に論理的・心理的な懸崖を認めること。
－個人間の対応を重視すること。個人に対して在るのは他の個人であり、連続性の他端に在るのは社会・国家ではない、という観点を取ること。
－「社会－内－存在」としての個人の在り様は、既存の「本質規定」に拘束され得ない、という観点を徹底させること。
（essence と existence という、あの慕わしくも厳格な区別を、我々は日常の次元では好んで忘却してしまっている！）

このような「解体」への観念的な見通しが立てられたにしても、しかし『大学』の理想、個人の修身に於いて国家の平静は確定されるとするユートピアへの目論見は、理想への希求が存続するかぎり容易には消滅し難いようである。たとえば広義の「技術」の発展は上に最初に挙げた「領域ごとの特性」の認識に役立つのだが、しかしその「技術」の越権を拒む心理のおのずからなる発生は「技術」が発展すればするほど抑え難くなるであろうし、また領域間の「懸崖」の容認は、連続して在る心の「安定性」と比べると、やはり受け入れ難い感情の「不安定性」を含んでおり、それだけ新たな安定への努力をわれわれに強いてくるがゆえに、敬遠されてしまうことになる。

既に大正五（1917）年三月、宇野哲人は『大学』の解説で、「今や個人主義瀰漫して、亦天下国家を顧りみる者なく、功利主義熾盛にして、亦誠意正心の何物たるかを知らざる有様で、識者の傷心憂慮して措かざる所である。

苟くも経世済民の志ある者は、必ず此書を反覆熟読して、之を体得せんことを努めぬばならぬ」と悲憤慷慨しているが、それでは彼の積極的な主張は如何と見ると「身をもって模範となって家を斉(ととの)え、一家を斉(ととの)えてしかる後国を治め、国治まってしかる後天下を平らかにすることができる。(...) これらの家庭的道徳は、直ちに移してもって国を治め、天下を平らかにすることができる...」という、朱熹の時代であれば妥当したかもしれぬ提案・主張に返ってしまっている。だが実際の「我が国」のその後の推移を見ると、個人主義も功利主義もその基盤はむしろ脆弱であったことが露呈されたようであり、「齊家」→「治国」の連続性もその実現が保証されることはなかったようである...

政治的な権力は何かを推薦することに於いてよりも何かを禁止することに於いてよりいっそうその実行力・実現力を発揮するものかもしれないが、とすれば、『大学』の「解体」── 流行している生硬な語彙を援用することを私は必ずしも好まないので、ここにかぎらずこれまでもカタカナ(その他)でそう表記してこなかっただけであるが、この「解体」の語意も "déconstruction" などの方向と重ね合せてもらってもよいのである ── は、結局はアメリカ占領軍の権力がもたらした思想に於いてでなければ実質的には可能でなかった、のかもしれず、しかも同時に、占領軍の権力をもってしても観念的にはなし得なかった、のかもしれない。そして後者のような容易には規定し難い「消滅し難さ」に関する根拠は、対立する条項をひとつに縫合してしまう、論理的というよりはむしろ文化的な「包容力」が、東洋(と仮に呼んでおく)という地理的名称を有する文化地域には存在しているから、なのかもしれない。

[一例としての『菜根譚』]

中村璋八先生には、私は多くの知識を授けていただき、頂戴した文献等も多く、後は私が勉強するだけ、という態勢を整えてもらってはいるのだが、しかし私の方は「齊える」対象も定かならず、いまだ生半可な情報を恣意的に「整える」程度の作業しかなし得ていない。道教・陰陽道研究に於ける中

村先生の位置は、先生のさまざまな活動歴からその高みを推定してみることしか私には出来ないのだが、ただ、いちおうは読了し得た先生の翻訳作品に洪自誠の『菜根譚』がある。

儒仏道三教に通じていた著者の言うならば箴言集であるこの『菜根譚』は、時として新鮮な表現に満ちているが、私にとって注目に値すると思われる特質、『菜根譚』に於いてのみならず東洋的という形容をも可能にするようなその特質は、展開されている論理の内部に認められる（上記のような）「包容力」の存在、敢えて言うならば時には強引とも思われるような「連続性を保証する力」であった。

「反対物の統一」あるは「対立する事物の（強制的な）同時共存」がもたらす驚き・衝撃、そしてその瞬間に於ける或る種の「覚醒」の体験は、おそらく禅的な行動の過程での体験（西洋に於いてもその種の体験を認める神秘主義的傾向性がないわけではなかろう）であるのかもしれないが、この『菜根譚』では、それが同時に道徳的な提言にも利用され得るような、何かしら不可思議な了解・感覚を与えてくれる体験として表現されている。

そんな風に私は読んだのだが、そうだとすれば、私が把握したかぎりでの『菜根譚』の諸言動は、必ずしも一般に通用する「社会的規範」として無条件に即座に推薦されるものではないようにも思われる。以下の例（ここでは訳文を引用する）が示すように、対立する項目の非連続的な、刺激的な対照は、「格物・致知」から「誠意・正心・修身」そして「齊家・治国・平天下」と上昇あるいは下降する『大学』での縦の系列のなだらかな移行とは異質な、むしろ横の系列に於ける［媒介のない－両端の－直接的・対比的併置］、それがもたらす微妙な「衝撃・覚醒」をめざしているように私には感得されるのであり、その衝撃・覚醒の感覚が、おそらくは形式的な矛盾をも「包容する力」として顕在化しているように私の観点では読まれる（ただし、『菜根譚』からは離れるが、「テイゼンノハクジュシ」とか「カンシケツ」のような、「包容」であるのか「対比」であるのか、私にとっては不明な「命題・語彙の提示」は私の解釈対象を超えており、別の課題とならざるを得ない）。

－人が世の中を生きてゆく時には、自分から一歩をゆずることがよりすぐれた道である。

－ものの道理に明るく、才智すぐれた人は、その才智をおさめ隠して控えめにすべきなのに、かえってその才能を外に見せびらかす人が多い。

－世間に対して発言をせず、寡黙を守る立場にいるとそこではじめて、発言が多いことが、ただ騒がしいだけでいかに役に立たないことであるかがよくわかる。

東洋風（と仮に呼んでおく）の「謙譲」とでも言うべき態度、自身を控えめに見せることによってことの真実に近づき得るという発想は、たとえば「実るほどに頭を垂れる稲穂」の在り様とは異なるはずである。後者は、重量に耐えられない自然（物理）の傾きを、道徳的な理想に重ね合せ（イメージの喚起力に頼って）転化して把握・表現しているのだが、同じく自然な真実を言うのであれば、「等身大の自己」をみせるという行為基準がまずは提起されるべきであろう。それがいわゆる「平常心」（「直心」）で言い尽くされるのであれば、自身を控えめに見せる行為を「道徳的な重力にしたがった自然な傾き」であるように言いたてることは抑制されなければなるまい。

実際に、特に上の三番目の提言が示すように、反対の立場に身を置くことで新たな認識が得られ了解されることどもは多いにしても、反対の立場に身を置くことで道徳性が得られ認められるという立論は、これは本来は（ということは「形式論理に於いては」ということかもしれないが）、ほとんど虚構の、成立し難い論理ではないのか。

西洋風（と仮に呼んでおく）の見方には、自身の立場の提示にのみ過剰に自己意識が集中して表現がなされる「傲慢の罪」があるが、これと対比するなら、必要以上に自身を隠す、あるいは仮に自身と反対の立場に身を置くことによって「その場をやりすごす」態度は、敢えて言うならば「偽善の罪」の在り様に等しいと見なされる（これは日常的にもそうであろう）。確かに、ことは「自己と他者との関わり」に関するから、見方を変えて、他人の存在

領域を過剰に脅かす「傲慢」は非難されるにしても、他人の存在領域を尊重する「謙譲」は非難の対象どころか擁護・推進すべき価値・行動である、となるかもしれない。しかしそれも、「過剰に」尊重するのでなければ、という前提がおそらくはつけられることになる。あるいはまた、「快・不快」の原則を採用し、傲慢は不快だから悪であり謙譲は快適であるから善であるというように感覚と道徳的価値との結合がなされるかもしれない。だが既出の「信頼」もそうであるが、文化的環境の相違を考慮に入れるならば、感覚・感情の普遍性を無前提に保証することは困難であろう。「普遍的に」他者に不快感を与える行為があったとしたら、それはおそらく道徳などを語る以前の行為なのだ。

認識の錯誤に基づく時には表現の自制は有り得るが、相手への広義の警戒・攻撃以外には自身の了解の在り様を偽って表現することはしない・すべきでない、という西洋風（と仮に呼んでおく）の思想に対して、相手の立場（それを推察するときの「独断」が内包されている）を思いやり自身の［感覚・感情・論理］の表現を敢えて避ける、という「謙譲の美徳」と称されてきた東洋風（と仮に呼んでおく）の思想の在り様は、好むと好まざるとにかかわらず、今後は、東洋・西洋という便宜的な区別を捨て去った［表現・了解］上の差異として、何らかの評価・判断が迫られることになるのであろう。だが今ここの時点で問うているのはもっと初歩的なこと、自身の内部において認識上の反対の立場に立つことによってそれが道徳的とされ得るのは、ひょっとしたら何らかの錯誤に基づいているのではないか、という単純な疑問である。あるいは、道徳の命題じたい（「定言命法」をも含めて）がこれまで述べてきた意味での自然の傾きに関しては錯誤に於いて成立しているのではないか、という感懐である。そしてまた

－ほんとうに清廉潔白な人には、清いというような評判は立たないものである。清いという評判が立つのは、実はまだ欲望の心が残っている証拠である。

ほんとうに巧妙な術を体得した人は、巧妙な術を見せるよう

なことはないものである。巧妙な術を見せるというのは、
実はそれがまだ未熟な証拠である。

というような、表現された実際の現われと表現されていない実質的な在り様との違いの道徳的な提示、あるいは最高度の技術がもっとも平凡に表現され得るという技術的な逆説の提示（Ars est celare artem：わざを隠すのが真のわざ)。さらに以下の例は、私の連想ではヴァレリーの如き「名人芸」に達した者が漏らしそうな言葉に思われるが、しかしそれを東洋の風土のなかに置き直すと、見通されるのは何故かやはり依然として「頭を垂れる稲穂」のイメージになってしまうようである。

－文章も、技巧が最高の域まで上達すると、そこには特別に珍しい奇抜な表現があるわけではなく、ただぴったり合った表現があるだけである。
人格も、最高の境地にまで達すると、そこには特別他と変わった様子があるわけではなく、ただ人間本来そなわっているものがそこにあるだけである。

もし稲穂に自己意識があれば、その自己表現には完璧な自己満足が込められている、ように私には思われる。

「愛」や「上下定分の理に純一な境地としての敬」あるいはまた「已むことを得ざるの誠」（相良亨『近世の儒教思想』）等々、朱子学一般に於ける他の多くの語彙群の語義が検討されなければならないのはもちろんであるが、昔から聞きなれたこの種の反語・韜晦の表現を改めて対象化してみると、たとえば「偽善」というような外からの決めつけに対する論理的な対応（の準備）は皆無であることに気づく。せいぜいが「わかっていないなあ」という風に本人にとってのみ自明な文化的差異に還元して、論理的な説明への努力を拒むだけのようである。対応の準備がまったくないということは自身への完璧な「信頼」の表明でもあるが、しかし、無用な摩擦を避けるという「世間知」の現われによって行うのではなく、むしろ本来的に、対立物（「技巧」

の上とか下という方向も含めて）への移行こそが本来的な道徳性であるのだ、というかのごとき見解に対して、やはり今日に於いてはその妥当性の検討が求められているのではないか、というのが、全然「わかっていない」私の、『菜根譚』についてではなく『菜根譚』を通しての、ひとつの感想めいたもの、ということになる。

※

アンリ・マスペロやマルセル・グラネを筆頭にフランスの中国思想研究は非常に盛んで、現に私も中村先生からフランスの若い研究者を紹介されたことがあるが、文化的な在り様の相違を超えて理解の幅・深さを広げようとする「交流（communication)」の試みは、西周の場合もそうであるが、宗教性も関わってくると、なかなか困難な仕事であるに相違ない。中村先生の活動は、しかしこの方面に於いても、東洋風の了解様式の拡大を求める方向で大変な努力をされ、それに応じた成果をあげられているように私などは感じている。頑な道学者ではない、道教学者あるいは道士である中村璋八先生に、新たなる桃源の境で、〈不老長生〉そのままに、心だけは〈羽化登仙〉の軽やかさで、さらなるご活躍をお祈りしたいと思う。

（1995年９月29日）

中村博士の想い出

松　本　丁　俊

初めて中村博士とお会いしたのは、旧図書館（現耕雲館）２階篠原研究室で、すでに定年退職された篠原寿雄教授の紹介で、こちらは町田高校から来

られた中村璋八先生ですと言われました。温厚な顔付きで、いかにも先生と言うタイプ、足は少々跛足であるが、歩くのに全然不自由はない、戦時中はその事で兵役を免除されたとか、塞翁の事を思い浮びます。当時まだ大学に入って間もない新人の私に取ってはとっても羨しい限りであります。先生は週3日研究室にお目見えになりまして、色々とお話している内に、先生の中国古典に対する深い認識を感じました。私は台湾で生れ育ったので、中国古典の基礎教育はきちんと受けておるが、中村先生とは雲泥の差で、ただ感服するばかりです。特に緯書の研究は、故大正大学学長であった安居香山先生と共に日本、いや世界において第一人者である。

緯書の事で、中村先生と私の縁が一層深くなり、数回緯書修成の索引を手伝う事になりました。又、台湾中央研究院の陳槃先生へお会いしたいとの事で、台湾行きのお手伝いもした事がありました。中村先生が台北に着いた事、家内もそこにおりましたので、私の家族全員と知り合う事になりました。中村先生に台湾での一番の思い出と聞きますと、花蓮の東淨寺にお泊りになった事と言われております。当時の住職は父と同じ駒沢大学を留学された曽景來先生です。一夜のお話しで、曹洞宗大学の昔話しなど、じっくりお話し出来たとの事です。

又、台湾師範大学の招きで、日本各大学の教師十数名が台湾を訪問した時、中村先生が団長になり、台湾政府関係機関でスピーチをして、一層国際感覚を高めました。それ以後中国本土にも数回渡り、中国の友人を沢山作り、日中文化交流に貢献して来ました。

一方、学内では、中国文学ゼミの指導を長年にわたり行って来て、今やその教え子は各方面で活躍されている。佛教学部の石川力山教授もその中の一人で、今は中文ゼミの指導補佐役をしております。毎年夏季にはゼミ合宿をして、学生指導を強化し、交流を深めてます。O・Bも時には参加し、私も3～4回ほど参加しました。毎朝7時に起床し、早速勉強会が始まり、上級生が読み、下級生がそれを一字一句追いながら憶えてゆき、私が台湾の中学、高校で受けた漢文授業と同じ様なものでありました。これを昼間と夜の三回

行い充実した合宿生活を送っています。

中村先生は学生の指導に熱心であるのは言うまでもなく、御自身も常に勉学に励んでおり、先に述べた緯書の研究ばかりでなく、五行、食経なども研究されており、学位請求論文には五行大義を出されて、駒沢大学文学博士を得たのであります。私も当時及ばずながら、中村先生の学歴・業績一覧を正書して手伝った憶えがあります。

中村先生は無類の旅行好きで、学問に対する情熱さは、旅行で休養をよく取り、明日の研究に備えている様です。特に地方学会に参加する事が先生にとって最大な楽しみの様です。幾度か地方学会で同じ宿泊所に泊まりましたので、必ず近くの名所を見学するのが先生の最大な楽しみであります。お蔭で私もくせになりそうなくらいに学会が非常に楽しくなりました。

この度定年を迎えられて、中村先生はますます研究に励み、自由気ままに旅行が出来て、精神や気力を充実させて行かれるように願ってやみません。

徳不孤、必有鄰

江　林　英　基

十数年前、日本の大学を卒業した留学生は、母国へ帰らず、日本に就職することは大変難しいことでした。その原因としては、日本の法務省が、雇傭ビザの発行を厳しく規制していることであります。また、当時多くの日本企業・法人組織はまだ閉鎖的な観念をもっていたことであります。留学生は母国で少年から青年までの長い期間に日本と異なる文化・風俗・習慣を身に付けているため、日本に来て数年間の留学生活でこれらを変えて、日本社会文

化に適応することはなかなか難しいことであります。さらに、留学生の出身・人柄・交友関係及び政治理念なども調査しにくいため、チームワークを重視する日本の企業・法人組織は留学生を雇う勇気をもっていませんでした。しかし、ここ数年、円高、学術研究の国際化のため、企業の多国経営、産業の海外移転、大学国際部の増設などの対策により、今迄より多くの留学生が雇われ、企業の対外部門での通訳を担当し、母国での日本企業の支社に派遣され、大学での外国語の授業を担当しています。

就職活動をしている留学生は、少数の人が日本での親戚や友人からの協力を得る以外、大多数の人は、二つの方法を使います。その一つは大学での指導教授であり、もう一つは、日本に在留する生活保証人であります。両者とも留学生に一番尊敬される人であり、相談になってくださる相手であります。中国・台湾の社会では、人が人を企業・法人または個人に紹介することはあまり難しくないため、知人程度でも紹介して貰えます。しかし、日本の社会では大変難しいことであります。中国・台湾の社会では、紹介者は単なる紹介人であるが、日本の社会では、紹介者は推薦人であり、保証人にもなり、被紹介者の能力・人柄または入社後の活動までにも責任を負います。従って、多くの留学生は大学での指導教授あるいは日本に在留する生活保証人にしか紹介を頼めません。就職できた留学生は、その後日本国籍を取る際に、殆どが仕事を紹介してくれた指導教授あるいは在留保証人の名前を借りて、自分と家族の日本の氏名として使います。これは、「飲水思源」（水を飲む時はその源を考える。即ち、幸福な時にその幸福のよって来たるところを忘れないこと。庾信・征調曲）を示すことであります。

1981年、私は大学院後期博士課程の単位を取得して、満期退学になりましたが、学位論文を完成するために、日本に引続き在留することが必要でありました。私は友人のＬ君につれられて、中村先生に事情を説明しました。私は台湾で小学校・高等学校に国語（中国語）の授業を担当した経験があるため、駒沢大学で非常勤外国人講師として採用していただきました。翌年、台湾にいる家族を日本に呼んで、一緒に暮すことを日本法務省に申請しました

が、法務省が難色を示しました。その理由は、収入が足りなくて、生活を維持できないためとのことでした。そのとき、中村先生は、「君子成人之美」（君子は人が善事を成就するのに力を貸すもの。論語・顔淵第十二）のお気持をもたれ、「送仏送到西天」（仏陀を送なら天竺まで。即ち、徹底してやる。児女英雄伝第九）で、法務省に要求されたコマ数を快諾して下さいました。そして、十年間の離散家庭はやっと一家団欒をむかえることができました。

十年前、城西歯科大学は綜合大学に昇格するため、学部を増設し、教職員を募集しまし、中村先生は私を当該大学に推薦して下さり、採用されました。その後、私は先生のご厚意にそむかないように研究と教学に尽力し、ついに、博士学位を取得し、教授に昇進しました。中村先生は私の指導教授ではなく、日本に在留する保証人でもない、当時に、ただ「一面之縁」（一面識の縁、浅い交わり、紅楼夢第一）でありながら私を助けて下さいました。私と家族はずっと「飲水思源」のお気持をもっています。

私の友人Y君は、台湾である大手企業と私立大学のオーナであります。Y君は数人の子供を日本に留学させるため、私と一緒に中村先生をお訪ねて、アドバイスをいただきました。帰る途中でY君は中村先生が人格者であり、子供の保証人になって欲しいと私に頼みました。その後、中村先生ご夫妻はY君の子供達の面倒を見つづけ、外国からの他の留学生も助けました。中村先生は、いつも「助人為楽」（他人を助けることを楽しみにする）の心をおもちしている学者であり、国際親善のことを黙々と促す方であります。先生は頻繁に国際会議にご出席し、いつもさまざまな国の友人に囲まれています。中国語の「勝友如雲、高朋満座」（良い友人をたくさんもっていること。王勃・滕王閣序）と言う言葉を先生にお贈りすることは一番ふさわしいと思います。論語・里仁編に言われる「徳不孤、必有鄰」（人徳のある人は孤独であるはずがなく、必ず親しい人ができる）は、まさに、その通りであります。中村先生は来春駒沢大学を定年退職されますが、その後も必ずたくさんの友人に囲まれると私は確信しています。

それから、今後とも先生には国際親善のご活躍を引継けるようにお願い申

し上げ、さらに、先生のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

（この文章は、印刷を便利するために、中国語のところにも日本の漢字を使います。）

中村先生の退任によせて

鶴　島　俊一郎

中村先生の知遇を蒙ってからもう二昔近くになる。駒澤大学の非常勤講師に採用していただいた頃は、まだ4号館の一階に講師室があり、先生はそこまで足をはこばれて学生や授業の状況などきかれることもあった。私も研究室に伺って教えをうけたことが多かったが、教学、研究の面もさることながら、後に御推輓をうけて新設校の講師となって赴任してからは、教学方針、教育行政の面についても随分と御知恵を拝借させていただいた。また、一般的にいって日本の大学には種々の仮装をこらした奇怪事が根強く存在するものだが、時にはぶしつけであったかもしれぬ私の愚痴や質問についても、いかに対応すべきかという心構えについて教えられ、激励されたことは度々であった。温雅でしかも毅然とした先生の言に私はどれだけ助けられたことかしれない。

一つ残念なのは、私は元々中国古典を学んでいたにもかかわらず、目先の仕事と自らの語学の学習にかまけて、この方面で教えを乞う機会が少なかったことである。先生には駒澤大学の教授としての職責以外に、研究者として、特に道教研究者としての日本国内、外での活躍と業績が極めて大きな比重を

占めると私は存じているので、教えを仰がずにうかうかと過ごしてしまったのは残念なことだった。しかし、先生には退任の後はますます研究面での活躍と研鑽を深められると私は思っているので、この面については今後も御教示をいただける機会があることを私は楽しみにしている。

あらためて、先生にこれまでの御指導、御鞭撻に対する感謝の意を申しあげるとともに、先生の今後の御研究の発展と、御健勝をお祈り申しあげて擱筆いたします。